

宮澤賢治センター通信

(岩手大学内)

(題 字 / 金森由利子)

第 12 号

発行人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目3番5号
電話 019-621-6672
FAX 019-621-6493
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者 岡田幸助

目次

- 巻頭言 理事挨拶……………1
- 第5回総会の開催
新役員の紹介……………2~4
- 定例研究会の概要……………4~7
- 本の紹介……………6
- 5周年記念大会を振り返って…8
- 「ミニ・茶話会」便り……………9
- 賢治と音楽の会便り……………9・10
- 宮澤賢治記念短歌会報告……………11
- 特別寄稿……………12~14
- アンケート調査より
岩大生が好きな賢治童話……………14~16

巻頭言



〈風評〉をめぐるつて

宮澤賢治センター理事 木村直弘

地球の自転が僅かに速まるほどの巨大地震による東日本大震災発生からはや四ヶ月が過ぎました。改めましてこの度の震災で被害に遭われた皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた方々の御冥福と被災地の一日も早い復興を謹んでお祈り申し上げます。

賢治の生没年に大震災があったことはよく知られています。が、小生も阪神・淡路大震災で被災して二ヶ月半後に盛岡に赴任するなど、多少震災には縁があるようです。岩大の教員になってから初めて執筆した文章は『学園だより』六七号(特集:食べる)掲載の「崩stock、奉職、そして飽食」という被災体験がらみのエッセイでした。今回も、震災発生後初めて発行さ

れるセンター通信に寄稿させていただくことになりましたし、再び「食」にからめつつ、震災、特に〈風評〉被害の問題について思うところを綴らせていただくかと存じます。

ちょうど震災発生の前日夕方に、小生が司会を仰せつかった賢治センターの定例研究会がありました。研究会後の懇親会では、小生が人前で初めて賢治関連のお話をした教育学部の公開講座(二〇〇六年五月二七日)にも参加されていた方々から、講座冒頭、話のツカミに小生が「賢治との共通点」についての話をしたことを覚えていられるとお声掛けいただき、当時のことが懐しく脳裡に甦ってきたことでした。

「共通点」とは、(下手な楽器を弾く、一重險で坊主頭で未婚のヴェジタリアン)という点でした。皆様はこうした言葉で表象される人間についてどのようなイメージを持たれるでしょうか？

前掲エッセイのタイトルからも想像されるように、被災の反動か安定したポストを得ることができた気の緩みか、赴任後、暴飲暴食を繰り返していたため、とうとう自律神経失調気味になったことを前厄ごろに自覚した小生は、思いきって生活を変えてみました。具体的には、断酒、菜食(といっても卵や乳製品は食べる所謂ラクト・オボ・ヴェジタリアン)への食生活の変更、そしてついでに、禿げも目立ってきたので、今まで

やってみたことがなかった坊主頭にと「見た目」の変更です。ここで自分としては「想定外」の変化が出来ました。それは自分自身にはなく、周囲にです。自分としては迷惑をかけるわけでもないのに、酒宴にも今までどおり参加しようと思っていたのですが、だんだん誘われなくなりました。その理由は、体調も復調した見た目も食生活も「ノーマル」に戻ってからわかりました。当初、「何かあったの？」と周囲から繰り返された質問に対して、当人の口からは前述の理由がそのまま返答されているにもかかわらず、周囲はそれに納得せず勝手に理由づけ(まさに「想定」)が始まり、後から聞けば「新興宗教に走ったのでは？」というのが最終的な落としどころだったようです。つまり、本人にそれを確かめるわけでもなく、周囲になんとなく納得されたその理由づけは、もはや「ノーマルでない」と「想定」された者とは以前と同じようには接しないという、微妙な無意識的疎外化を結果的に惹起することになったのです。そして、今、福島第一原発事故にかかわる風評被害のニュースを見聞きするたびに、自身の体験を思い出さざるをえません。

小生の体験と原発の風評被害に関連して個人的に注目したのは、当事者の発言は顧みられないということ。ではこうした「疎外化」は何に依拠しているのでしょうか？つまるところ、それは、「坊主頭」「ヴェジタリアン」あるいは「放射能汚染」といった言辭に付された「定型」的イメージに由来していると言つてよいでしょう。この「定型」とは、内田樹が『街場のメディア論』(二〇一〇年)で別括した「具体的現実そのものではなく、『報道されているもの』を平気で第一次資料として取りだしてくる」メディア的言説操作の特質、換言すれば、「誰でも言いそうな言葉」Ⅱ「その発言に最終的に責任を取る個人がない言葉」の謂です。

「わたしは春から生物のからだを食うのをやめました」と親友・保阪嘉内への手紙に認め一時期ヴェジタリアンを志したであろう賢治がその後小生と同じ

体験をしたかどうかはわかりませんが、少なくとも『ビヂテリアン大祭』で描かれた菜食主義をめぐる百家争鳴が、放射性格質をめぐって氾濫する今日のメディア的言説やそれ由来の風評と通底していると感じるのは小生だけでしょうか。あるいは、諸々の意見を乱立させたのちヒルガードにどんでん返しさせ、最後は「ご勝手にご完成を」と読者に委ねてしまう『ビヂテリアン大祭』の大団円が、「最終的に責任を取る個人がない言葉」にもっと注意深くなれという示唆にもとれると考えるのは穿ち過ぎでしょうか。

この震災発生後、震災からの復興への祈りを込めてワシントンやパリでも翻訳が朗読された「雨ニモマケズ」には、大政翼賛会文化部によって政治的に利用（『詩歌翼賛・日本精神の詩的昂揚のために』第二輯に収録）されたという来歴もあります。この通信第九号に掲載された「賢治の可（塑）性」という自己紹介文で、多様な読みを投影しうる「記号」としての賢治について触れましたが、その諸刃の剣としての「可（塑）性」が孕む危うさについても改めて自問自答が続く今日この頃です。

（岩手大学教育学部教授）

宮澤賢治センター第5回総会 平成23年6月24日

「宮澤賢治センター」の第5回総会が、平成23年6月24日（金）に盛岡市産学官連携研究センター（略称コラボMIU）で開催されました。ご来賓として岩手大学藤井克己学長の祝辞の後、武田純一理事が議長となり、事業報告・事業計画・役員を選出の3議案について佐藤竜一事務局長が説明し、原案の通り承認されました。

総会終了後は設立5周年を記念した懇親会となり、平山健一前岩手大学学長などご来賓の挨拶の後、コントラバスによる演奏など余興も披露される中、終始和やかな雰囲気の下で行われました。

1 2010年度事業報告（10年4月1日～11年3月31日）

- ・総会 6月15日（火）
- ・定例研究会 第41回4月16日（金）、第42回5月27日（木）、第43回6月15日（火）、第44回7月26日（月）、第45回8月5日（木）、第46回9月10日（金）、第47回10月8日（金）、第48回11月26日（金）、第49回12月9日（木）、第50回2月4日（金）、第51回3月10日（木）
- ・第4回宮澤賢治学生短歌大会 12月11日（土）に表彰式
- ・宮澤賢治記念月例短歌会
- ・賢治と音楽を楽しむ会
- ・「経埋ムベキ山」登山 7月17日（土）
- ・「宮澤賢治センター通信」第9号・第10号・第11号発行 7月20日（火）・11月30日（火）・3月30日（水）

2 2011年度事業計画（11年4月1日～12年3月31日）

- ・総会 6月24日（金）
- ・定例研究会 第52回4月21日（木）、第53回5月26日（木）、第54回6月24日（金）、第55回7月14日（木）、第56回9月16日（金）、第57回10月21日（金）以後1月を除き毎月一回開催する。
- ・第5回宮澤賢治学生短歌大会
- ・宮澤賢治記念月例短歌会
- ・賢治と音楽を楽しむ会
- ・「経埋ムベキ山」登山

3 役員を選出

- ・センター5周年記念展示会（企画に協力） 関豊太郎と宮澤賢治―賢治の学んだ72の石たち―6月24日（金）～7月24日（日）
- ・但し7月18日（祝）は休館
- ・宮澤賢治センター通信第12号・第13号・第14号発行7月・11月・3月の発行予定
- ・その他



挨拶する藤井学長



参集者（懇親会のもよう）

宮澤賢治センターの規約と役員・事務局名簿

宮澤賢治センター（岩手大学内）規約

第1条 名称

この会は、「宮澤賢治センター（岩手大学内）（以下、「本会」という。）」と称す。

第2条 目的

本会は、宮澤賢治についての多くの関心を結集し、会員相互の交流を促進して、賢治研究の普及と発展に努めることを目的とする。

第3条 事業

前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 定例研究会
- (2) 全国宮澤賢治学生大会
- (3) 会員の主催する賢治関連企画
- (4) その他必要な事業

第4条 会員

宮澤賢治について関心があり、本会の目的に賛同する者は誰でも会員になることができる。なお、会費は当分、徴収しない。

第5条 役員

本会に、次の役員を置く。

- (1) 代表 1名 本会を代表し会務を総括する。
- (2) 副代表 1名 代表を補佐し、代表に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 理事 若干名 役員会の構成員として、会の運営の審議に当たる。

2 任期は1年とし、再任を妨げない。ただし、連続任期は3年までとする。

3 各役員は総会において会員の中から選出する。選出方法の詳細については、別に定める。

第6条 事務局

事務局に事務局長、事務局次長、幹事を置く。

- (1) 事務局長 1名 日常的な会務の処理・運営上の調整等を行う。
- (2) 事務局次長 2名 事務局長を補佐し、事務局長に事故あるときはその職務を代行する。
- (3) 幹事 若干名 会の実務を処理する。

2 事務局長、事務局次長は、役員会において互選する。

3 幹事は、役員会において会員中より推薦し、代表がこれを委嘱する。

4 事務局を岩手大学百年記念館に置く。ただし、日常的な連絡場所は、岩手大学地域連携推進センターとする。

第7条 総会

総会は、代表が招集する定例総会を年1回開催する。なお、役員会の決定または会員の三分の一以上の要請があれば臨時総会を開くことができる。

2 総会の議長は、代表が務める。

3 総会の議決事項は次のとおりとする。

- (1) 事業報告
- (2) 事業計画
- (3) 規約の制定及び改正
- (4) 役員の選出及び改選
- (5) その他必要と認められる事項

第8条 役員会

役員会は、代表、副代表、理事、および事務局長、事務局次長によって構成し、必要の都度開催して次の事項を審議する。

- (1) 総会の付議事項
- (2) 会員の入会及び退会
- (3) 本会の業務遂行上、緊急かつ重要な事項
- (4) 総会で決定した事項の具体的運営について
- (5) その他、必要と認められる事項

第9条 事務局会議

事務局会議は、代表、副代表、事務局長、事務局次長、幹事によって構成し、日常会務及び役員会の議題の整理等を行う。

(付 則)

この規約は、2007年10月11日から施行する。

平成23年度宮澤賢治センター役員・事務局名簿

(平成23年6月24日現在、アイウエオ順)

代 表	岡田 幸助	岩手大学ミュージアム館長
副 代 表	石田 紘子	深沢紅子野の花美術館館長
理 事	姉齒 武司	岩手大学工学部卒業生
//	池田 成一	岩手大学人文社会科学部教授
//	大塚 尚寛	岩手大学工学部教授
//	大橋 春香	岩手大学教育学部学生
//	岡崎 正道	岩手大学国際交流センター教授
//	木村 直弘	岩手大学教育学部教授
//	小島 聡子	岩手大学人文社会科学部准教授
//	佐藤 竜一	岩手大学大学教育総合センター特別講師
//	鈴木 幸一	岩手大学地域連携推進センター長
//	武田 純一	岩手大学農業教育資料館館長
//	羽倉 淳	岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授
//	橋本 裕之	盛岡大学文学部教授
//	早川 浩之	岩手大学地域連携推進センター主幹
//	向井田 薫	岩手大学北水会名誉会員
//	望月 善次	盛岡大学学長
//	森 三紗	岩手大学教育学部卒業生
//	山本 昭彦	岩手大学人文社会科学部教授
事務局長	佐藤 竜一	理事兼任
事務局次長	早川 浩之	同上
幹 事	姉齒 武司	同上
	亀井 茂	岩手大学農学部附属農業教育資料館研究員
	菅波 智洋	岩手大学地域連携推進センター主幹

新役員の紹介

賢治センターとのご縁



深沢紅子野の花
美術館館長
石田 紘子

平山健一学長のお骨折りによって岩手大学内に宮澤賢治センターを設立いただいたのは平成18年6月のこと、賢治が盛岡高等農林学校に入学した大正4年から数えて91年の大英断の賜です。「賢治研究の普及と発展、会員相互の交流、賢治への関心と親しみ」を設立の趣旨に望み善次代表のもとで順調に滑り出し後任の藤井克己学長・岡田幸助代表へと引き継がれて5年、既に大きな存在となっています。この賢治センターに私に関わることになったのは平成19年です。平成16年に杜陵小学校の六年生が山梨県知事さんから大切に育てていた「やまなし」の木を贈呈いただく幸運を得、この恵まれたご縁が岩手県知事さんから山梨県韮崎市のアザリアの会に「ぎんどろ」の幼木を贈呈(平成19年)する機会を生み、相互交流誕生へと導いてくれました。これら二つの出来事に私

等でお知りになった望月代表から「二つの友情の木」について発表のお誘いをいただいたのがその始めです。

この「友情の木」の交流は、盛岡高等農林学校で芸芸同人誌「アザリア」を発行した賢治・嘉内・小菅・河本たちの友情に急接近のチャンスへと運んでくれました。一昨年春には岩手大学で「アザリアの咲くとき」展が、秋には嘉内出身の韮崎市で「銀河の誓いは永遠に」展・舞台発表会があり、4家のご遺族もお揃いになりました。今年の3月には、小菅出身の栃木県さくら市出版の「氏家町史」(史料編 近代の文化人)が長年の調査・研究を経て発刊され、その第5章「小菅健吉と『アザリア』の仲間たち」(77頁)には、アザリアの仲間たちの書簡・葉書その他、「盛岡高等農林学校の試験問題(大正4年3月)」「交友会々報(大正5・6年)」も掲載されました。

が成人するお祝とするのです。若者になった6年生には、交流の担い手としての思いが静かに芽生えることでしょう。

かつての杜陵小学校の六年生は、来年の1月に成人式を迎えます。山梨県知事さんからいただいた「やまなし」は実を結び、その初生りはお酒となり、今じっと成人式を待っています。賢治の童話「やまなし」の、かへの親子が楽しみに待った芳醇なやまなし酒をあの日

定例研究会の概要

第51回 3月10日(木)

もう一つ楽しみなのは、盛岡高等農林学校時代に賢治が嘉内に宛てた73通の手紙展と盛岡開催です。若き日に悩み苦しみ真剣に生きた賢治と嘉内に、大正という時代の特殊性と普遍性と

ともに、その日の筆圧まで伝わってくる賢治の本物の手紙を通して触れてみたいのです。保阪家の温かなご理解をいただきながら、手紙のお里帰り展を開催することは届かぬ夢でありません。それは、現代に生きる自分自身を問い直してみる機会ともなりましょう。

大学の先輩のデザイナーから1991年度北上市ふるさと創世事業「文学碑のある街づくり事業」に協力してほしいと声をかけて頂き、参加したプロジェクト事業の役割は、賢治の歌碑であった。心の中で「また賢治か」と、引つかかる思いのままデッサンやエスキスを制作し、宮澤家の清六さんにプランを持って行くことになった。テーマは注文の多い料理店、設置予定地は北上駅東口広場である。

会場 農学部南講義室6番

会場 教室

講師 岩手大学教育学部教授 藁谷 収氏

演題 「彫刻を中心とした賢治の表現について」

司会 木村 直弘

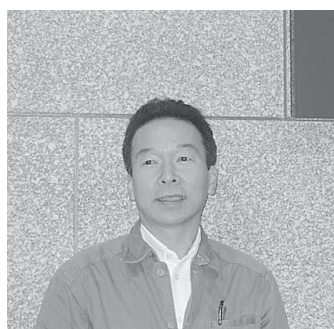
参加者 17名。

賢治を形で表現する。私には荷が重い仕事と感じていた。

1985年東北新幹線開通に伴う新花巻駅前整備計画に関わって、『セロ弾きのゴーシュ』をテーマに彫刻制作の依頼があり、無我夢中で32トンの御影石の表面に数種類の石材を用い象

眼を施したレリーフを完成した。当時の花巻市長はじめ宮澤清六さんに大変褒めて頂いたことを思い出す。「非常に解りやすい表現で良い作品ですね」と、述べられたように記憶している。あまり気にせず、褒められたのだからもちろん嫌な気持ちにはさらさら無かった。

その後、賢治のテーマの作品は数点花巻を中心に設置させてもらったが、1990年花巻市営球場前のモニュメント制作は、自作としての抽象彫刻表現であり、賢治から離れてある意味自由にやれた思いがある。同じ作家が、同じ街に表現を異にした彫刻を設置することは、異例かもしれない。何れ一流では



藁谷 収氏



宮澤賢治石碑（1926年春頃、農学校実習田で撮影された写真がモチーフ）
岩手大学農学部附属農業教育資料館前

上市の課長さんが丁寧に懇願されたが、許可はおろなかった。何故か、悔しい思いや改めて新しいプランを提出する気持ちにはならなかったが、プロジェクトのメンバーに申し訳ないという気持ちだけが残った。

この出来事が、私自身に彫刻の目的と表現方法を見つめ直す切っ掛けになったことは間違いないと思っている。清六さんの考えが正しいのだろうかとか、私の表現が稚拙すぎるのだろうかとか。様々な重い悩みを表現者として背負っていくことになる。それからは、野外彫刻に関わったり、国際彫刻シンポジウムに参加することで、自分の制作表現の方向を悩みながらも、多くの作品を制作して来た。野外彫刻を通して、時の流れに耐え永く存在し続ける彫刻を作ることの重要性を感じ、街づくりで人との関わりを楽しむことも教えられ、平々凡々制作を続けていた。

ある日（2000年）元岩手大学長、当時北水会会長の船越昭治先生より、賢治の像を造らないかとのお話を頂いた。封印していた賢治。天を仰いで絶句した。少し考えさせて頂く時間を貰い、1年程の時間を経て、やらせて頂くことを伝え、ただ、清六さんに何らかの承諾を頂かなければ制作できないことをお話しする。賢治そのものの肖像表現は決してやらないことは気持ちに強く思っていたが、気持ちの何処かでまた断られるかもしれないという気持ちも大きかった。船越先生に迷惑をおかけすることになる。デッサンを清六さんに届ける旨伺っていたが、暫く何の答えも聞かされなかったが、制作を開始することにした。

2001年春、宮澤家から正式肖像権の許可が下りるが、清六さんの訃報を6月新聞で知ることになった。制作は安山岩の原石を安比高原に見つけることができ、およそ10トン程の原石2個を大ケ生のアトリエに運び入れたのは2001年の夏の終わり頃であった。制作テーマは『賢治と時間』。構想の通り制作を続け厳しい冬を経て2002年5月に完成し、除幕することができた。悩み抜いた形は、賢治の世界（形）を変容させるの

ではなく、継承させて行く。完成させるのではなく、伝え続けて行く。こんな方向性が出れば、この仕事は成功かもしれない。もちろん答えはまだ出ない。私自身大学を去り、老いさらばえても、この賢治像が残ることへの怖さと、残って行ってくれとの期待が今の自分には同居している。

（藁谷 収 記）

第52回 4月21日(木)

▽会場 農学部1号会議室

▽講師 元矢巾町収入役

松本 隆氏

▽演題 「賢治が愛した南昌山と親友藤原健次郎「銀河鉄道」の夜」の舞台は 矢巾・南昌山―宮澤賢治直筆ノート新発見―

▽司会 小島 聡子

参加者 25名。

一、はじめに

藤原健次郎は、矢巾町に生まれた。明治41年4月盛岡中学校に入学、寄宿舎12号室に入った。賢治は、1年遅れて明治42年4月に入学し、同じ寄宿舎の12号に入った。寄宿舎でランブ掃除を一緒にした二人は親しくなり、土・日の休みには、南昌山に登り、水晶やのろぎ石等を

拾い、健次郎の家に泊まる様になっていった。

野球部の四番バッターだった健次郎は、明治43年8月、野球の秋田遠征に参加し、横手から黒沢尻に帰る途中大雨に濡れながら2泊3日歩き通した疲れから腸チフスに罹り入院した。賢治は健次郎に手紙を出すか、その手紙を健次郎が見たかどうか、遂に9月29日急逝した。

賢治は、健次郎の死に大きなショックを受けた。

後に賢治は、健次郎との思い出を、童話「鳥をとるやなぎ」「谷」詩・短歌など多くの作品を遺している。中でも「銀河鉄道の夜」は、手紙で伝え得なかった約束ごとを、天国の健次郎に伝えるための物語である。ジョバンニは、南昌山の頂上の「天気輪の柱」（雨乞の石柱群）の下から天国に出発する。この物語には、二人の思い出が多く描かれている。

二、童話「銀河鉄道の夜」の舞台は、矢巾・南昌山

私は、平成15年9月23日、花巻のイーハトーブ館で開催された、第14回宮澤賢治学会に於いて、このことを研究発表した。また、昨年の暮れ本を出版した。次に、発表した九つの根拠を簡略に掲げる。

1、カムパネルラの命名であ



松本 隆氏

る。賢治は南昌山を「岩鐘」と呼んでいる。釣鐘草の学名カムパネルラを振って、カムパネルラとしたのである。花言葉も親交・友情であり、将に健次郎の名前に相応しい。

2、3章「家」の中に、学校の帰りにカムパネルラの家へ寄ってアルコールランプで走る汽車で遊んだとある。これは、二人でランブ掃除をした、健次郎の家に行つて泊まったことを表現している。

3、5章「天気輪の柱」の中の、がらんと空がひらけた場所とは、南昌山の「肩」である。

「天気輪の柱」とは、南昌山の頂上に農民達が雨乞いなどに奉納した石柱群である。

4、6章「銀河ステーション」の中の、「いきなり眼の前がぱっと明るくなって、億万の螢鳥賊の火」とは、南昌山の頂上に舞う数万の姫螢の群れであり「すぐ前の席に、ぬれたやうにまっ黒な上着を着

た、せいの高い子供」は、将に健次郎が横手から黒沢尻まで雨に濡れて歩き、病気になるたぬれた姿である。

5、7章の中の「カムパネルラは、その砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、…この砂はみんな水晶だ」のこの場所は「鳥をとるやなぎ」に出て来る、南昌山の「白い石原」である。

6、ケンタウル祭「鳥瓜ながし」は、賢治が健次郎に書いた手紙の最後に書いた「ウリを20だなんて喰わんようにしたまえ」の瓜であり、二人は瓜を沢山食べ、南昌山の川に流して遊んだ思い出である。

7、第9章の「ジヨバンニの切符」の中で、ジヨバンニは、二人だけになった時、ああと深く息をしました。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕は、…みんなの幸せのためならば僕の中からなんか百べん灼いてもかまわない」これは、健次郎に宛てた手紙で伝え得なかった約束事を、健次郎に伝えた瞬間である。

8、同じ9章の中で、川に流れて溺れそうになったザネリを助け、カムパネルラが身代わりになって亡くなっている。

賢治は、優しく責任感の強い健次郎の人間性を強調したかったのである。野球部の小田島監督や小本中将の追悼文の中でも、他人が嫌がる事を率先して実行する健次郎の勇気を絶賛していたのも、これを裏付けている。

9、最後に、賢治は「日輪と山」の絵を描き遺していた。これは夏至の日に健次郎の生家から見た南昌山の日没と一致する。賢治は、二人で感動しながら眺めた日を「銀河鉄道の夜」(ケンタウル祭・夏至の祭り)の日と定め、絵が完成したなら、口絵が表紙絵に使用おうと描いたものと思う。

三、健次郎の生家から発見された賢治の中学1年生のノート
このノートは、平成13年7月に健次郎の生家から発見された。賢治が忘れて行ったものである。ノートには、1年の地歴、漢文、鉱物、英語、数学など授業の際ノートしたものである。その中には落書きではあるが、貴重な絵や文章が描かれている。それは次の通りである。
1、「未来の賢治」と書き、その脇に胸に勳章を付けた姿を描いている。将来、総理大臣を夢見ていた様だ。そして隣には、オルガンを弾いている姿がある。音楽家になりた

◆本の紹介

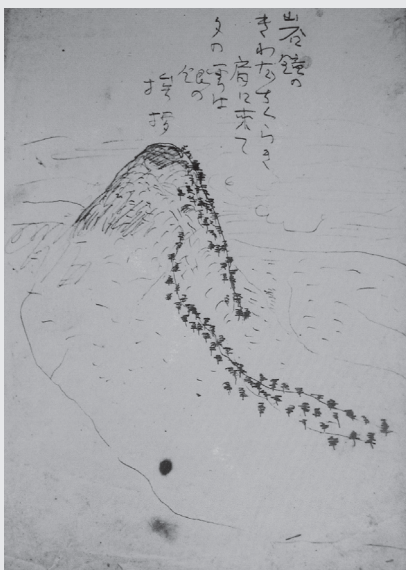
定例研究会(第52回)の発表は本書に基づいてなされたものです。「銀河鉄道の夜」に関してはこれまで多くの論考が発表されていますが、矢巾町在住の著者はその舞台を南昌山であるとし、藤原健次郎(矢巾町出身)生家から新たに発見されたノートを頼りに真実に迫っています。

賢治と藤原健次郎、賢治と藤原嘉藤治(紫波町出身)などの関係が膨大な資料に基づいて検証されていますが、中でもこれまでほとんど知られてこなかった藤原健次郎に関しては、本書で初めてその人物像がはっきりと描き出されたといっても過言ではないでしょう。

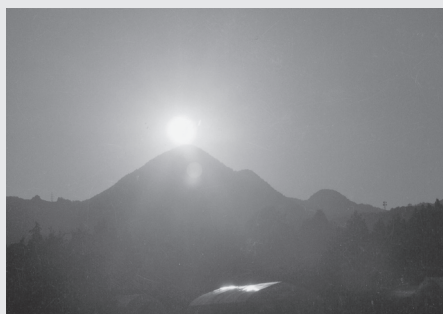
著者は『銀河鉄道の夜』に登場するカムパネルラのモデルが藤原健次郎なのではないかという説を本書で展開しています。

巻末に賢治が中学1年生のときのノート復刻版が収録されているなど、資料的にも価値のある内容となっています。

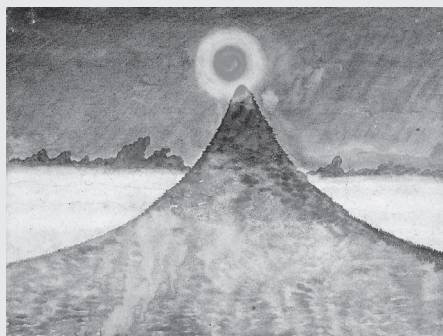
(佐藤竜一 記)



賢治のスケッチ画(南昌山を描いた画、資料提供:林風舎)



健次郎生家から見た夏至の日の南昌山夕景



賢治作「日輪と山」



童話『銀河鉄道の夜』の舞台は矢巾・南昌山

松本隆著

A5判上製 349ページ

定価 2,000円(税込み)

2010年11月刊

発行所: (有)ツーワンライフ

(TEL 019-698-2333)

かったようだ。

2、南無妙法と書いている所がある。賢治は、この頃には、既に日蓮宗に興味を持っていたことが伺われる。

3、蛇が、鶏の雛を喰わえている絵がある。この頃から賢治は、既に弱肉強食の世界を嫌っていたように思う。その他、父の絵など多数が描かれている。尚、本には、全頁の復刻版を入れている。

(松本 隆 記)

第53回 5月26日(木)

- ▽会場 農学部1号会議室
- ▽講師 宮沢賢治記念館副館長 牛崎 敏哉氏
- ▽演題 「震災と賢治」
- ▽司会 池田 成一

参会者 35名。

あの日から三ヶ月になろうとしている。

東日本震災後の四月早々、被災地の最初に訪れたのは、かつて私が小学三年から六年間を過ごした大船渡市であった。当時、津波はこないだろうと信じていた高台の中腹にある大船渡小学校からの思い出の通学路は、信じられないことに両側が(山側までもが)、倒壊した家屋や瓦礫の山になっていた。悲

しいことだが、宮沢賢治が「イーハトーブ」と名付けた岩手県の原因風景の壮絶さを、身をもって知ることとなってしまった。

ところで、今回の大震災において、「雨ニモマケズ」やいくつかの賢治作品が、日本のみならず世界各国で、明日への復興に向けた「祈り」や「願い」として受け止められ、紹介されている。そのはじめは俳優の渡辺謙さんが、震災後の「ささやかな光」として「雨ニモマケズ」を朗読する動画が、脚本家・小山薫堂さんが立ち上げたメッセージサイト「KINEMA(きずな)

311」にて流されたこと。これをきっかけとして、4月1日にジャッキー・チェンさんやジュディ・オングさんらが開催したチャリティコンサートにて曲がつけられ、香港、台湾、中国など約300人の歌手によって、日本語で大合唱された。続いて4月6日、フランスのパリ・シャンゼリゼ劇場での日本支援公演



牛崎 敏哉氏

「ホープ・ジャパン」にて、俳優のランベール・ウィルソンさんによって、「雨ニモマケズ」がフランス語で朗読され、翌日の7日には、スペインの州立劇場における「頑張り日本コンサート」の終盤にて、「雨ニモマケズ」が日本語とスペイン語で朗読された。

更に、同日11日、米首都ワシントン大聖堂において、同聖堂のサミュエル・ロイド首席司祭が祈りを捧げたあと、「雨ニモマケズ」の英訳が読みあげられた。「雨にも勝つ」「風にも勝つ」というアメリカの風土において、なかなか「雨ニモマケズ」の賢治精神が普及しなかったが、今回、震災の映像とともに、共感の中で浸透していったことには驚かされた。

さて、宮沢賢治は、自ら「イーハトーブ」と名付けた岩手県にて、その生涯を過ごした。童話集(大正十三年刊)の序文において、「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです」と述べているように、賢治は自然の中で生き、生かされてきた人だった。ただその大自然は、決して人間に優しいばかりではなかった。

賢治は明治二十九年(一八九

六)八月生まれだが、その二ヶ月前には死者二万人をこす明治三陸地震津波がおり、また誕生の数日後には、岩手と秋田の県境に最大震度七と推定される陸羽地震が起きている。そして没年の昭和八年(一九三三)三月には、昭和三陸地震津波により再び大被害を受けたが、賢治の命日は、それから半年後のことだった。

大正十二(一九二三)年には関東大震災も起こっているわけだから、わずか三十七年という、まさに賢治の生涯と重なる間に、これほどの大震災が繰り返して起きていたことになる。

ところで、これらの大震災は、これまで東北をたびたび襲ってきた凶作による大飢饉に追い打ちをかけたものであった。明治年間だけで二十四回、大正から昭和初頭までも次々と凶作が襲い、東北では娘の身売りや一家心中など、困窮の果ての実に悲惨な現実があった。繰り返される夏の冷害などの「飢餓の風土」に対して、賢治は真つ向から、農業指導と人々の生活上のために東奔西走し、無償の実践を続けたのだった。

昭和六年九月、東北砕石工場の仕事で東京に上京中に発熱し倒れ、死を覚悟した賢治は遺書を書くが、なんとか持ち直し花

巻に戻っての十一月三日、手帳に書き記したのが今に知られる「雨ニモマケズ」である。しかもこの手帳が賢治愛用のトランクから発見されたのは、賢治が亡くなった翌年のことであった。つまり「雨ニモマケズ」は極めて個人的なものであり、読者に向けて書かれた他の作品とは全く異なるもの。雨にも風にも負けない「丈夫ナカラダヲ」持ちたいという願いは、病床での賢治の挫折や悲しみを思うとき、本心に心からの祈りであったといえる。

賢治にとって三陸海岸は、童話「ポラーノの広場」において「イーハトーブヴォ海岸」と呼び、作品中、そこに出張した主人公が地元の人々の歓迎を受け、「たびたびわたしはこれで死んでもいい、と思ひました」と書くほど愛してやまない海岸だった。晩年に自分の職業として、釜石市での水産製造業を志したほどで、一昨年新資料として発見された、昭和八年三月の詩人・大木実あて葉書では、昭和三陸津波にふれ「被害は津波によるもの最多く海岸は実に悲惨です」と書いている。賢治の体験した悲しみや苦しみを、今私たちは心の支えや癒しと感じているのだろう。

(牛崎敏哉 記)

5周年記念大会を振り返って

代表 岡田 幸助

宮澤賢治センターは平成18年6月1日「どなたもどうかお入りください（賢治への関心）それだけが条件です」をキャッチフレーズに発足した。それから丸5年間、初代望月代表のもとに盛んな活動がなされた。宮澤賢治についての多くの関心を結集し、会員相互の交流を促進して、賢治研究の普及と発展に務めることが目的で、研究的なものに特化しないことをモットーとした。

月例研究会、その後の茶話

会、全国宮澤賢治学生大会、ウオークツアーやバスツアー、埋ムベキ山登山、宮澤賢治記念短歌会、「アザリアの咲くとき」展、賢治と音楽を楽しむ会など多彩な活動がなされた。「音楽を楽しむ会」は自然豊かな百年記念館で賢治の聞いたであろう曲を鑑賞している。毎月名古屋から新幹線でおこしになる会員もおられる。

6月24日から7月24日まで「関豊太郎と宮澤賢治、宮澤賢治が学んだ72の石たち」展がこの5周年大会に合わせて1ヵ月間開催されている。賢治作品に出ている72種類の鉱石のうち55個を展示している。これはつくばの地質標本館で昨年開かれた「イーハトーブの石たち」展を土台にしており、パネルはその時のものである。鉱石は関豊太郎が購入し収集した標本群で、実際に賢治が学んだ鉱物標本と図書を展示している。展示が実現したのも産業技術総合研究所



応援歌を歌う伊藤利巳さん

の加藤碩一先生、青木正博先生のご好意とご協力の賜物である。手弁当で2週にわたり農業教育資料館に来てくださり、手つかずであった1000個近い鉱物標本群を整理、クリーニングしてくださった。これらは宮澤賢治が実際に手に取って何度も観察した石そのものと考えられる。私も青木先生の指導でクリーニングをお手伝いした。刷毛に石けんを付けて水洗いすると100年の埃が洗われ、元の透き通った輝きが甦った。手にずっしりと感じる石を眺め、賢治はこんな石が好きだったのだと納得した。彼が人造宝石を作



朗読する石原黎子さん

り商売しようとしたのもうなずいた。5周年記念大会では、副代表の森三紗さんにお父様のことをお話いただくことにした。望月先生との対談をとおして森 莊巳池の要点を逃すことなく聞くことができ良かった。総会にはお忙しい中、時間を割いて藤井克己学長先生が出席してください。パーティーでは石原黎子氏の朗読に始まり、創設当時の平

山元学長先生が乾杯の音頭を取ってくださいました。この会が生まれた時のいきさつをお話してください。パーティーには40名の方が出席してくださいました。食べ物、飲み物の準備をしてくださった姉歯さん以下婦人の皆様に感謝する。余興として情報メディアセンター事務官の寺山貴大さん率いる「夜長3丁目演奏団」が軽快な音楽



軽快な音楽を演奏する「夜長3丁目演奏団」

を演奏してくださいました。伊藤利巳さんが応援歌を歌ってくださいました。会場正面には昨年作成した「雨ニモマケズの印鑑」をかたどった賢治センターのロゴマークが張り出され、雰囲気盛り上げた。故菊池二郎さんは「賢治は岩手の風景を一変させた。暗く悲慘な岩手は賢治によって光と風の岩手に変わった」と言われたが、沿岸の被災者の方も賢治さんから力を得て復興されるものと信じる。賢治の学んだ岩手大で学ぶ「地を活かし、地で学ぶ」精神で賢治センターの活動を続けたい。

「三・一茶話会」便り ——一茶一話——

毎月定例会後の茶話会では、なかなか他では聴けない話が出てきて、新しい賢治さんの捉え方に大きなヒントが出てくる様な気がします。

○「農業資料館」の前にある賢治さんの像について制作時のエピソードが明かされ、参加者からの意見も出て新たな賢治像への考え方も提案されました。

制作者はそれ迄前衛的な像を主に制作してきたそうです。今回の制作に当たって「具象」と「抽象」の賢治像が考えられましたが、「具象」で制作する事になったそうです。像は二脚で立つ姿が考えられましたが、安定の上で舟越保武氏からのアドバイスで現在の連続の像になり、宮澤清六さんも了解の像になったという事です。その後賢治さんの像は「具象」の姿が良いと言う事になり、例えば十和田の乙女の像の様な「具象」の姿になり、抽象的な像は避ける様になったとの事です。その際、作者の前衛的に考えた像の姿も出され、参加者からは寧ろ賢治さんの意味合いからは抽象的な像こそ、賢治さんをより深く表すのではないかと

の評も出、抽象的な作品の持つ力を改めて考えさせられました。それは、賢治さんの世界は通常の世界の境界を越え精神の世界へ、宗教の世界へと入り昇華して行くものが多い。その意味では「具象」から「抽象」へ、現象から精神・意識下の世界へという方向が大切でそこが本質の人であり、賢治像は寧ろ抽象性が大切と言えるのではないかと議論になってきました。大変に興味のある指摘と思われました。

その精神性は今回の「三・一」東日本大震災を悼む香港、スペイン、パリ、ワシントン等世界各国でのチャリティ・コンサートや集いで凶らずも「雨ニモマケズ」が各会場で朗読され合唱され、大きなテーマとされている事にうなずく事しきりです。それは法華経の十界互具を中心にした菩薩界の世界、いわゆる共助の世界から利他の世界が表される「詩」であり、震災復興の励まし「詩」でもあり、震災後の文明観のテーマになる「詩」と思うからです。

○「銀河鉄道の夜」の舞台は矢巾町の南昌山と云います」との講師の話に引き込まれる定例会となりしました。それは盛岡中学時代の賢治さんの親友で、残念な事に若くしてチフスで亡く

なった、矢巾町の藤原健次郎氏との交流が作品の底流に有るとの事でした。講師の方からカンパネラは藤原氏のことであり、「銀河鉄道の夜」はそのオマージュであるとお話でした。その裏付けとして賢治さんは一年生の夏休みに健次郎氏の家に泊まっており、その際賢治さんが自分のノートを置き忘れたのを後に藤原家から発見されたこと。賢治さんの絵の「日輪と山」は藤原家から夏至の日に南昌山を眺めたとき、丁度太陽と山があの角度の風景になること。南昌山は岩鐘の形をしており、植物では「釣鐘草」の形をしており、英名ではカンパネウラというそうで、それを親友のカンパネラと命名したこと等々裏付けとして話してくれました。講師は若い頃結核を煩い病床でこの件に気付き、その後ずっと研究してきたとの事で感心しきりでした。

○「震災と賢治」という角度は思っても見ない角度でした。それは「明治三陸地震」の起きたのは明治二十九年六月十五日で、賢治さんが生まれたのはその二ヶ月後の明治二十九年八月二十七日でした。又、亡くなったのは昭和八年九月二十一日で、「昭和三陸地震」の起きた昭和八年三月三日の六ヶ月後の事で

した。丁度、大地震後に生まれ、大地震後に亡くなった。事になり。賢治さんは三陸海岸をイーハトーヴ海岸と名付け愛していたとの事です。それは賢治さんの母方の叔父さんが釜石只越町で宮澤薬局を開いて居り、しょっちゅう釜石に出かけてはレコードコンサートを開いて居ったそうです。賢治さんは魚を食せずせつかく叔父さんがおいしい物と思つて作つても食わず、叔母さんはがっかりしたとのことでした。菜食主義者の賢治さんを思い浮かべさせるエピソードだと思います。

以上のような、茶話会では他ではなかなか聴けない様な話を聞く事が出来、大変貴重な時間になって居ります。どうぞ皆さんもご参加下さい。ちなみに、お茶とお菓子で300円、ビールをお飲みの方はプラス200円です。

(姉齒武司 記)

賢治と音楽の便り

との思いでこの会の企画をいたしました。又、音楽好きのメンバーと賢治さんもこの場に一緒に聴いていたら、との想定で三年間聴いて参りました。

メンバーは連続して参加して下さっている方や、途中から替り新しい方が参加して下さりましたが、それぞれが月に一度じっくり音楽だけの世界に浸って居ります。

○五月二十六日の定例会後の茶話会で、賢治さんがレコード・コンサートを釜石で開催していた事をお伺いいたしました。釜石で賢治さんの母の弟朝吉(?)さんが「宮澤薬局」を開いており、賢治さんが良く出向いていたそうです。その際レコード・コンサートを開催していたとの事です。さすがに重い蓄音機は持つて歩かなかつたようですが、レコードは持参していたとの事でした。その事は岡澤敏男さんが朝吉さんの奥さんから直接聞いたとのことで、賢治さんの釜石でのレコード・コンサート活動を私としては余り耳にして居らず新しい発見でした。ちなみに、奥さんは何の曲を聴いていたか曲名までは判らなかつたそうです。残念な事です。

○三月度の「賢治と音楽を楽しむ会」は「三・一東日本大震災」の翌日の三月十二日であ

り必然的に中止の思いで居りましたが、当日も百年記念館にいらした方がおったことを後から知り申し訳ない思いでした。それ迄「モツレク」はじめ各作曲家のレクイエムを続けて聴いておりましたが、大震災をうけレクイエムを連続して聴く事は一旦中止とすることにしました。

○ 今回参加者の代表として、北田まゆみさんから三十四回、三十五回、三十六回の「音楽会」を通しての内容と感想、又、名古屋より出席頂いている植原幹雄さんより雑感を頂いて居りますので掲載させて頂きます。

(姉齒武司 記)

○ 岩手大学宮澤賢治センターの活動の一つとして「賢治と音楽を楽しむ会」が発足して早いもので、もう三年目となりました。月一度、土曜日の午後二時から開催されています。

この会の主宰である姉齒武司さんの情熱に感服しつつ、パーフェクトの参加とは行きませんが、私は第一回目から参加させて頂いております。

今年七月十六日の会で、三十七回目を迎えることとなるわけですが、三十三回目からはモーツァルトの曲を聴き続けています。メンバーの方からのリクエストも受けながら、今迄にレクイエム、シンフォニー、セ

レナーデ、ピアノ協奏曲などを聴いてきました。

同じ曲でも指揮者の解釈によつて、かなり違った雰囲気をかもし出すなど、抱いていた曲のイメージの変化に驚くこともあります。シンフォニーなど長い曲をすべて聴く時間はありませんから、ある楽章を抜粋し、その部分のみの聴き比べにするなど、姉齒さんのアイデアで工夫を凝らしながら、楽しい企画を組んでおります。

四月・五月の会ではクララ・ハスキルのピアノによる「ピアノ協奏曲二十番」と「二十四番」を聴き、またスウェーデン映画「短くも美しく燃え」のテーマ音楽にも使用された甘美で哀愁漂う「ピアノ協奏曲二十一番」の第二楽章の美しい曲にも酔いしました。

この頃のモーツァルトの作曲活動は絶頂期にあり、特に協奏曲は傑作揃いと言われています。その中で最高傑作との評判高い曲を聴く事ができました。また数多い交響曲では最晩年の作品で三大交響曲とも言われている中の「四十一番(ジュピター)」と「四十番」を鑑賞しました。「四十一番」はモーツァルト最後の交響曲で、「ジュピター」という副題がついているだけにスケールの大きい荘厳な

曲を的確に表しているように思えます。第四楽章に至つては、まるで天上世界に誘われたような気分させられます。また「四十番」も皆さんに馴染みのある曲です。ベートーベン、シューベルト、メンデルスゾーンが絶賛した曲と伝えられており、モーツァルト創作の頂点と言われています。

つい先日、六月の会では引き続き「ピアノ協奏曲二十六番」を聴きました。これは皇帝レオポルド二世の戴冠式にウィーンの音楽祭で演奏されたもので、その後この曲を別名「戴冠式」と呼ぶようになったそうです。また交響曲は三大交響曲の一つである「三十九番」を取上げました。今回は趣向を凝らして古楽器を使いモーツァルト時代の演奏法で奏でたものを聴く事が出来ました。と同時に、同じ曲を現代ロマン派の演奏法でも聴

き、その違いの聴き比べにも挑戦しました。古楽器使用の演奏法では第三楽章メヌエットの部分にビブラートの有無がはっきりしており、重厚さと力強さを感じました。私個人の感想は、モーツァルトは優雅さと華麗さが真髓だと勝手な思い込みがあり、好みとしては聴き慣れていることもあるのでしようが、やはり現代ロマン派の演奏に軍

配を上げました。

モーツァルト以外にも元氣の出るヴェルディの歌劇「アイーダ」、リスト生誕二百年を記念して、賢治も聴いていたのではと言われている交響詩の「前奏曲」や「愛の夢」、シヤプリエの狂詩曲「スペイン」などなど広範囲にわたるクラシック曲を堪能しました。

どなたでもどうぞ土曜日の午後、農学部「百年記念館」二階の瀟洒でレトロな部屋で、毎回素晴らしい音楽を聞きながら、日常の煩わしさから解放され、癒され、時にはホット珈琲などを味わいながら、安らぎのひと時を過ごしませんか。

(北田まゆみ 記)

○ 六月六日は旧暦の五月五日である。端午の節句(こどもの日)である。しかしながら、この日が中国の楚の人である屈原が国の惨状を憂いて、汨羅(ベキラ)という河の渕へ身を投げた日であり、「ちまき」は屈原に対するお供え物であるということを知っている人はあまりいないかも知れない。

昭和維新の歌という歌がある。二・二六事件や三島由紀夫の自殺を引き起こした危険な歌とされているが、不思議な吸引力がある。一部土井晩翠からの引用がある。七五調である。

一、汨羅(ベキラ)の渕に波騒ぎ 巫山(ふざん)の雲は乱れ飛ぶ 混濁(こんだく)の世に我れ立てば 義憤に燃えて血潮湧く

二、権門(けんもん)上(かみ)に傲(おご)れども 国を憂うる誠なし 財閥富を誇れども 社稷(しゃしよく)を思う心なし

(以下省略)

わが国の現状をみるとこういう歌に共感がわくが、義憤のあまり頭に血がのぼつてはいけな

い。

ベートーヴェン弦楽四重奏曲など聞いてみよう。さとの境地という感じがする。私は、これを味わうにはまだ人生修行が足りないと思う。

モーツァルトの「アヴェ・ヴェルム・コルプス」もこころが癒される。人生の悲しみや苦しみを超越した澄み切った諦観がある。

澄み切った諦観といえば、クラシック音楽ではないが、万葉集 志貴皇子のうたで、私の好きになったがある。

「石走る垂水の上のさわらびの萌え出ずる春にりにけるかも」

春が来た喜びの中にどこか哀愁がある。

(植原幹雄 記)

宮澤賢治記念短歌会報告

会員 田村 依江

定年退職後、シルバークレジットで研修をしておりました時、姉齒武司さんに賢治短歌会へのお誘いをいただきました。

四月の定例会で矢巾の松本隆さんもお話なさいましたが、私も小学校の頃、学校で「風の又三郎」の映画を観て「宮澤賢治」を知りました。白黒でほんやりした音もはっきりしない映画でしたが、何か当時にはない物があり、幻想を好む年頃にはひかれるものがあつたのでしょうか。この短歌会に入会する事で、定例研究会にも参加でき、色々な側から「賢治さん」の学習ができています。

毎月一回開催される短歌会は三月は大震災の影響で自然に流れてしまいました。四月はいつにも増して作品が多く、それぞれに震災に対する感慨の作品がありました。望月先生のお話は、「鹿踊りのはじまり」と関連して、盛大の橋本裕之先生の「こぶとり」のお話でした。伝承芸能として同じ源を持つという事で、興味深いものでした。望月先生の、ノスタルジヤーを感じられるという日本海の短歌

二五首は、先生のお気持ちがよく理解できるものでした。

「なぜ酒田なのですか」と訊く人の響きが愉えようもない。酒田とは酒の湧き出る田んぼだ、とあなたに告げるべきことだった。

五月はジェイ・ルービン著『風俗繚乱―明治国家と文芸の検閲』の紹介でした。私としては、啄木は社会に生き、賢治は自分に生きた人という印象でした。

今年の平泉の「曲水の宴」に望月先生がお出になると伺って楽しみにしておりましたが、取りやめになり残念でした。「おみなこそ曲がりくねって流れ行く桃の簪まぶしきまでに」の歌が披露されました。

六月には岩手大学三年生の菅原優さんが参加してくださり、活気づきました。先生からは『イーハトヴ学事典』という本の紹介を受け、「大地震」の箇所を読んでいただきました。

次に四・五・六月の短歌会の作品を四首ずつ紹介します。

姉齒武司

・MQの玄き海神(わたつみ)立ち上がり人家空を呑み込む高さ39M
・砂浜のさざなみさわさわ寄せ返す津波と同じ場所とは思えず
・毎日の震災ニュースに呑み込まれ心の不安に一日過ぎし
・西日射す瓦礫の里は静かなり西方極楽浄土か地獄

阿部真紀子

・雪解けの隙間にのぞく地面にはクリスマスローズの蕾ふくらむ
・微笑みも涙も全部使い切り能面のごとく翁座れり
・旅立ちの支度思わず師の呼吸この世の声で呼んで私を
・一本なら花にも絵にもなりましよう増えるドクダミひたすらに抜く

北田まゆみ

・「だよね」つと娘二人は会うごとにきつと言ってる私のことを
・ほら！あなた指差すそこに空っぽの花かごありし花はどこだろう
・さくら！さくら！満ち溢れてよこの春は別れの宣告たくさんあるから
・水の精オンディーヌかも私(わたくし)はあるがままにて透(す)く水纏(まと)う

小菅アイ

・老いしかば寒気身に凍む堪え難き凍裂の樹映像に見ゆ
・三階のビルにて地震におののけり暗き階段よるめきくだる
・月光は余震に怯ゆる被災者の苦しみを知る由もなき照る
・被災せし子らにおくらんランドセル届け来たり春の雪の中

昆明男

・うち上がる漁船は底を上に出し幸運丸と船名見ゆる
・山田線宮古近くで梅咲けり区界駅はまだ雪の中
・桜咲き桜散りし北の里故郷の春なんぞゆるせん
・春過ぎて夏来たりなばかまわずに静かな海で泳いでみたし

佐藤静子

・親を子案じて幾度も飛ばしたる言(こと)の葉地震(ない)の夜宙を彷徨う
・大地震(ない)の後にゆるゆる氷溶け四月の御所湖に四月の光
・我を見るしげしげと見る姑(はは)の眼に映る我とは真冬のトマト
・瓦礫より櫻水仙吹き出せば言の葉よりも大地を信ず

田村依江

・停電の暗き街中行ける時明るく灯る塾の窓の灯
・災害の残したものは心のみ無くした人も残した者も
・キクキクと鳴き声立てて鳥の群並びて行きぬあちらが北か
・あらわずに言葉はなしという言葉震災に知る誠の言葉

三木与志夫(望月善次)

・寂しさを形にせんと汽車はまた緩くカーブを描(か)くのであった
・なつかしくまた寂しさを堪えたる日本海こそあなたの記憶
・果然と立ち尽くすのみあなたへのかける言葉を只呑み込みぬ
・音もなき世界は限りなく沈む海底(うなぞこ)深く鐘鳴り渡り

吉田直美

・老いることのひとつひとつを見定め黙って畳んで心に仕舞う
・暗闇と余震と寒さの三月の夜にはやけにラジオが響く
・震災後三日目に問うメールには「ボランティアしてます」病持つ乙女(ひと)
・ホントはねレモンケーキが好きですと貴方に言えた六月でした

特別寄稿

宮沢賢治と石原莞爾

岩手大学国際交流センター教授

岡崎正道

東日本大震災の発生から、早4ヶ月が過ぎた。地震・津波に加え原発事故による放射能汚染に日本人は皆おののき、未だに確かな解決の道筋が見えたとは言い難い。

私は福島県北部の梁川という町（現在は伊達市）の生まれで、原発騒ぎですっかり有名になつてしまった南相馬市（かつては原町市といった）にも、小学生の時4年間住んでいたことがある。

両親も他界しまた親戚たちとも没交渉となつてしまつていゆえ、今は福島とはほとんど縁がないが、それでも生まれ故郷の苦難を見るのは勿論愉快なことではない。

岩手に来てちょうど20年になり、今はすっかり岩手県人となった。私は4月3日に釜石・大船渡・陸前高田（それに宮城県）の気仙沼も）の被災地を中国人留学生4名とともに視察して以来、10回近く現地を訪れたが、その惨状はまさに言語を絶するものがあった。そんな時「もし宮沢賢治が生きていたら、何を思い何を語つただらう」と、

ふと思った。

賢治は1896年に生まれて1933年に死去したが、奇しくも彼の生年と没年に三陸地方を大地震・津波が襲い、多数の犠牲者が出た。

大自然の脅威にさらされながら人間がいかに賢く生き抜くか、また愛すべき自然（山や海や天体や動植物等々）と人間はいかに調和して生きてゆくべきか、賢治は生涯考え続けていたに違いない。

「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」（『農民芸術概論』）大宇宙の中ではちっぽけな存在にすぎない人間だが、ささやかな幸福を求めて自然の中に大きなロマンを感じていこう。大なる夢とロマンを追いかけながら、他方災害や凶作などに常に苦しめられていく農民たちを現実はどうやって救済していくか、詩人・浪漫作家賢治と農業指導者賢治は、いつも葛藤の中に身を置いていた。この二律背反の解決を模索して、宗教的熱情（法華経信仰）に彼はのめり込んでいったのかもしれない。

ところで今年（2011年）

は、中国の辛亥革命から100年の年にあたる。また満州事変（1931年）から80年、太平洋戦争開戦（1941年）から70年でもある。アヘン戦争後長く欧米列強の侵食に苦しんだ中国人が、ついに腐敗極まる清朝を打倒したのが辛亥革命であるが、その後成立した中華民国は安定した統治力を持ち得ず、軍閥割拠の形勢の中で、日露戦争以来の満州の権益を確たるものとするため帝国日本は軍事的投企を画策、1932年に満州国を独立させてその実権を握るに至る。満州からさらに華北・華中へと魔手を伸ばした日本が、ナシヨナリズムの炎を激発させた中国との泥沼の全面戦争に突入、これがために米英との対立を惹起して最後はアメリカの圧倒的物量の前に敗北を被り、国家破滅の一手手前まで追いつめられるのは周知の事実である。

満州事変の首謀者は、有名な石原莞爾である。「世界最終戦構想」という特異な歴史ビジョンの抱懷者であった石原は、真の世界平和を実現するための前提としての最終戦争を、日本はアメリカ相手に戦って勝ち抜かなければならないと考えた。そのため「準決勝戦」で

ある対露戦争に勝利する絶対条件が、満州占領であった。中国側からすれば紛れもない満州事変の侵略にほかならない満州事変の謀略も、石原にとつては東亜として世界から戦争を根絶するためのやむを得ざる必要悪と認識されていたのである。

その石原と賢治の間には直接の交流はなかった（と思われる）が、ともに国柱会の会員であった。国柱会とは日蓮宗の田中智学によって明治時代に設立された宗教団体で、その名称は日蓮の三大誓願「我れ日本の柱とならん、日本の眼目とならん、日本の大船とならん」に由来する。国難を打開する強烈な救国の意識に彩られた信仰は、高山樗牛など多くの知識人を惹き付けたが、石原と賢治もその一人であった。

心優しき平和主義者である宮沢賢治と侵略主義の権化たる石原莞爾を同列に論ずるとは何事か、と気色ばむなかれ。戦後（特に昨今）ことさらに持ち上げられて美化され、いささか鼻厘の引き倒しの感がなくもない賢治と、「15年戦争」の着火点となった満州事変および傀儡国家「満州国」の立役者としてひたすらネガティブに評され続けてきた石原と。しかし東京裁判史観的なフィルターを取り去ってみれば、この両者には意外な近似性も窺われる。賢治にも農本主義の傾向は多分にあり、その種の団体との接触も少なくなかつた。

満州事変を一応終結させた「塘沽（タンクー）停戦協定」締結の直後に世を去つた宮沢賢治が、もしあと数年の寿命を永らえていたとしたら、岩手の地からも多数送られた「満蒙開拓移民」の運動などに積極的に協力していった可能性がないとは言えないであろう。日中戦争の拡大に強く反対し東条内閣打倒の運動にも関係した石原莞爾が組織した東亜連盟と、宮沢賢治の羅須地人協会の性格の共通性もつとに指摘されるところである。

我々はあまり近視眼的にならず、もつと広くかつ柔軟な視野で物事を捉えていくべきであろう。

（宮澤賢治センター 理事）

宮澤賢治センター
(岩手大学内)

特別寄稿

「イーハトーブ・プロジェクト in京都」はじめました

「宮澤賢治の詩の世界」主宰 浜垣 誠司

私は京都で精神科の医師をしています。3月11日の午後3時前には、午前の仕事が一区切り付いて、診療所近くのお店でうどんを食べていましたが、揺れには気づきませんでした。携帯電話でツイッターを見て

と、大きな地震があったという関東方面からの書き込みがタイムラインにあふれ始め、それから事の重大さを徐々に知ることになりました。

仕事が終わって自宅に帰り、零時頃にテレビをつけると、もはや何の言葉も出てきませんでした。

※

関西地方に住んでいる者は、どうしても16年前の阪神淡路大震災との対比において、災害を

とらえてしまう癖があります。この震災の時は、私は大病院に勤めていた関係で同僚とチームを組み、神戸市内の保健所を拠点にして、交代で現場の精神科医療のお手伝いに入りました。しかし、かぎられた期間でよそ者が行える支援には限界もあります。地元の方々に対して何か「申し訳ない」ような気

持ちを味わいながら、自分たちなりに現地のニーズに応えようと試行錯誤するのが、当時の私たちの精一杯でした。

人間の力を越えた圧倒的な状況に囲まれると、「何とかしなければならぬ」という焦燥感と、「何もできないのではないのか」という無力感の両方が、自分の中に湧き起こりました。それらの板挟みになったままで、神戸市郊外の病院の空き部屋で寝泊まりしつつ瓦礫や焼跡の街へ通う数日間が終わりました。

その記憶は、しかし私にとっては貴重なもので、16年の間、何かあるたびに浮かび上がり、問題を考える際の物差しになりました。その後の仕事の方向性も、若干の影響を被りました。

※

けれども今回の東日本大震災が、阪神淡路大震災における自分の小さな経験や、その後勉強したことで推し測れるスケールを越えていることは、発生後半日で歴然としました。しかも、被災地は私が心から愛してきた宮沢賢治の故郷であり、岩手や宮城や福島には、これまで

賢治を通じてお世話になった方々も、たくさんおられます。

「何か自分のできることはないか」「何かしなければ」という気持ちばかりは焦っても、16年前とは違って小さな病院を担っている関係上、診療日に仕事を休むこともできません。

鬱々としながら日々の業務に追われつつ、震災から1週間ほどが経った頃、たまたま知り合ったばかりの菅原哲夫さんという賢治作品の朗読活動をしておられる方から、「京都で被災地支援のイベントをする企画はないか」とご相談を受けました。

それまで京都において、賢治に関わるそういう話題は全く耳にしませんでしたが、ここで私は何のほずみか、それならば一つチャリティイベントを企画してみようという気になってしまったのです。

そこで、以前から面識のあったイベントスペース主宰者の方にご相談したところ、ちょうど自分も何かしなければと思っていたところだったと二つ返事でご賛同いただき、そんなこんなで実現したのが、去る4月17日に京都市中京区の「アートステージ567」で行った、「第1回イーハトーブ・プロジェクト in京都」です。

※

菅原哲夫さんは、盛岡から少し南の煙山のご出身で、岩手県で高校の教師をされた後、関西に引越して大阪の学校に勤めておられました。退職されてからは、岩手の言葉で賢治の作品を読むという活動を、関西の各地で続けておられます。煙山というと南昌山の麓、賢治作品の舞台にもなっている地区ですね。

それから、「アートステージ567」というのは、古い京町家を改装した小ぢんまりと魅力的なイベントスペースなのですが、ここを運営しておられる本田さんという方は、何と賢治の詩「地蔵堂の五本の巨杉が」に「鈴木卓内先生」として登場する花巻出身の教育者鈴木卓苗氏のお孫さんであるという、素晴らしい賢治との縁があるので

す。この卓苗氏は、1906年（明治39年）の大沢温泉における「第八回仏教講習会」の際には、9歳の賢治と一緒に、記念写真にも収まっています。

さらに、鈴木卓苗氏の養子先である矢巾町の如法寺は、朗読をしていたいただいた菅原さんの出身地からもほど近いという、これまた不思議な縁につながれた会でした。

※

4月17日当日は、準備期間も

不十分だったにもかかわらず、会場の定員を大幅に越える方々が来て下さいました。菅原哲夫さんの心温まる朗読や、その物語とコラボレーションをする「フランス・シター」という楽器の繊細な音色を皆で楽しみつつ、京都でもやはり宮沢賢治の人気は強いものだ、あらためて感じた次第です。

会場には、関西岩手県人会の方や、ご親戚が陸前高田市で被災された方など、岩手ゆかりの方もたくさん来られていて、休憩時間の後には、現地の様子を伝えるお手紙を急遽ご厚意で読んでいただくことができて、被災地の状況に全員で思いを馳せました。

その第二部に私は「災害と賢治」という題で、作品や生涯をもとに賢治の自然観・災害観



を探るといってお話をさせてい
ただきました。話の内容は私
のブログに掲載していますの
で、よろしければご覧下さい。

(http://www.ihatov.cc/blog/archives/2011/05/post_740.htm)

※

さて、以上の催しは「第一回」と銘打っていますように、これから何回も、できれば何年も、京都の地で続けていきたいと考えているものです。

今回の震災の甚大な影響は、今なお現在進行形で続いており、ますます深刻化している問題も多々あります。まだ今は、政治もメディアも震災のことを

それなりに取り上げていますが、これから半年、1年が経過すると、果たしてどうなっているのでしょうか。その如何にかかわらず、私たちは諸共に、問題を正面から見据え続けていなければなりません。神戸大学の精神科で16年前に被災しつつ現場の指揮にあたった中井久夫氏が言ったように、「忘却こそ被災地の危機」だと、私も乏しい経験から実感しています。今回、震源から遠かった西日本では、当初から東北や関東とは危機感においてかなりのギャップがありました。これからの年月の経過に耐えつつ、京

都の地でも被災地のことを真摯に考え続けるスタンスを保つためには、どうしても何らかの「仕掛け」が必要だろうと思います。

そのこの「イーハトーブ・プロジェクトin京都」という催しに、「宮沢賢治の作品や生涯に触れることを通して、被災地への思いを新たにする」という趣旨において、そのような仕掛けの一つとなってくれないかと、私としては考えています。このささやかな活動が、これからも京都の街の片隅でしぶとく回を重ねていくことを、何とか目ざしたいと思っています。

※

ということ、最後に「第二回」のお知らせです。

次は9月4日(日)の午後6時から、京都市左京区にある「法然院」という由緒ある幽遠なお寺の本堂で、観世流能楽師の中所宜夫さん(写真)に、現代能「光の素足」を上演していただくことになりました。

宮沢賢治にも造詣の深い中所さんは、賢治の童話「ひかりの素足」において弟の樗夫を亡くし一人生き残った一郎の「後日譚」として、この能を創作されました。舞台の冒頭は、「ダーダーダーダー」スコ「ダーダー」という地謡とともに、一郎が一人山中で剣舞を踊る場面から始まり、全篇に様々な賢治作品のテキストが生かされています。当日は、これを中所さんに「一人能楽らいぶ」という形式で上演していただいた後、作品の解説やその背景に関するトークセッションを行う予定です。



今、震災後という状況において、肉親の死を背景としたこの能作品を上演することに関して、中所さんにも複雑な思いがあったとお聞きしています。しかし、生き残った私たちが「喪失」という課題とどう向き合うかという一点を取ってみても、この現代能が私たちに訴えかけてくるものは、非常に意味深いです。

催しに関するお問い合わせは、hanagaki@gmail.comまでお寄せ下さい。

アンケート調査より

岩大生が好きな賢治童話

岩手大学 大学教育総合センター 佐藤 竜一

私は岩手大学で「日本の文学」(宮沢賢治入門)を教えているのですが、受講生(182名)にアンケートを実施した結果、好きな童話としては以下の作品があげられました(人気順)。

1位	注文の多い料理店
2位	銀河鉄道の夜
3位	やまなし
4位	よだかの星
5位	グスコーブドリの伝記

好きな理由としては――。

注文の多い料理店

- ◆子供のころよく読んでいた作品だし、ちょっとミステリアスな感じや奇想天外な結末などがとてもおもしろかった。
- ◆人間と猫のやり取りなどとてもユーモアな作品だと思っからです。

◆小学生の頃、家にあった本の表紙にわくわくして、夢中になって読んだ覚えがあります。ページを進めるにつれて

膨らんでいく興味、驚き... 何度も何度も読み返した覚えがあります。

◆幼い頃に読んで不思議な気持ちにさせられたのが選んだ理由です。

◆幼い時に絵本で読んで親しみやすかったから、また、展開が面白かったから。

◆小学校時代に劇として発表したりしていたのでとても印象に残っている。

◆注文の多い料理店は、自分まで怖くなった。注意書きに二人が苦しい理由をつけて自分を納得させているのが自分に重なる気がした。

◆狐師たちが生き物を大切にしない態度をとったにもかかわらず、犬たちが助ける場面は賢治からのメッセージが隠されているように思えます。

◆小学生のころに読んだ童話で、小さいときに読んだのもかわらぬ印象に強く残っている作品だから。

◆本で読み、花巻の賢治記念館で映像でも見ました。空腹なのに長い時間お願いされたこ

とをこなしたあげく、自分たちが食べられるという結末に驚きました。

◆読んだのが小学生の時だったので、物語の場面が森や料理店でわかりやすかったし、服を脱いだバターを塗れだと思わず笑ってしまうような展開があるのが面白くて好きです。

◆小学生の時に読んだ「注文の多い料理店」が好きです。あまり細かく内容を覚えてませんが、読み進めていくときどきどきや物語の意味が分かった時の驚きを今も覚えています。

◆怪しいと思いつつもどんどん進んでいく猟師たちが滑稽に思えます。最後は食べられなくてよかったとほっとします。

◆注文が多いとは流行ってるって意味じゃなくてびっくりしました。そこがとんちみたいでおもしろかったです。私は注文の多い人はいやですねえ。

◆自分に危険が迫っていることに気づかず、好意的に注文を解釈する人間と、猫(?)との駆け引きが面白いから。

◆まさか自分たちが食べられるとは思っても見なかったところに作品の意外性を感じたから。

銀河鉄道の夜

◆悲しいお話ですが、私は小さい頃に絵本でこの作品を読んでもとても印象に残っています。その絵本の挿絵がとても綺麗な影絵で、不思議な銀河鉄道の世界にあっていたのが理由のひとつかもしれないです。

◆銀河鉄道の旅の描写が細かくて、読んでいて情景が目の前に浮かんでくる。ラストの二人の別れが、何ともいえない切ない気持ちになった。

◆私が初めて読んだ賢治童話であり、最も印象に残っている。銀河鉄道でおくる不思議な物事の描写や、様々な人間と出会うなかで成長していくジヨバンニの姿に心惹かれるから。

◆「銀河鉄道の夜」は読んだことではないが、アニメーションで知っていて好きだ。悲しい話だが感動的であり、また非現実的だがどこかリアリティが感じられる。宮澤賢治らしいものがあらわれている気がする。

◆世界観が素晴らしいと思うから。

◆漫画版を読んで不思議な世界観に引き込まれたから。

◆読むことで自分の考え以外の

ものの見方にふれられる、一番考えさせられる作品だから。

◆二次創作に銀河鉄道の夜を題材としたものがあり、原作のイメージがより膨らんだのが。また、銀河鉄道という夢が膨らむ題材であり、星に関する記述もあるところが気に入っています。

◆銀河にまつわる話の中に賢治の博識が出ていますし、SFというジャンルが新鮮に思われて、不思議な感じがします。また、完全版が存在しないのも私たちの創造力を豊かにします。

やまなし

◆「クラムボンが笑ったよ」や「カブカブ笑ったよ」という表現が、今でも思わず口を衝いて出てくるほど印象的であるからだ。また、川底という設定も好きだ。

◆初めて読んだ宮澤賢治の童話であり、独特の言葉づかいや擬音語が心に残ったから。また、絵本の絵がほんやりのした感じで本文ともに想像力を刺激されたから。

◆独特のオノマトペやオリジナルの生き物が個性的で面白いと思いました。

◆文章にリズムがあつて、読んでいるうちに楽しい気分になるから。

◆今まで読んだ中で一番好きな作品は、「やまなし」です。情景が幻想的に書かれていて、「クラムボン」という言葉がとても印象に残っているからです。

◆初めてよんだ賢治作品でした。クラムボン、かぶかぶ、など特有の表現が面白いと思いました。

◆やまなしは賢治を知るきっかけとなった作品で、小学校の授業でふれた作品でした。並行して賢治の人生の背景を調べたので、深く記憶に残っており思い入れのある作品です。

◆小学校のときに授業でやり、「くらむほんが笑ったよ。くらむほんがかぶかぶ笑ったよ」というフレーズが印象深くて好きです。

◆カニの親子の会話がかわいらしい。くらむほんの存在がとても不思議で惹かれるから。

◆クラムボンの存在が不思議だなあと感じ、心に残っているから。「クラムボンは死んだよ」など単調な文の響きが気に入っているから。

よだかの星

◆この作品は特に情景描写、色彩の描写が細かいため、自身で場面を絵本のように想像できるところや、ゆったりと語るような調子の文章が気に入っている。

◆この作品を読んだ時期、自分もよだかと同じようにいじめられていたので、よだかと自分を重ね合わせ、感情移入しながら読みました。かわいそうな物語ではありますが、とても心に残っている作品です。

◆こんなに悲しい物語を読んだのは初めてだったので、単純に、一番印象に残っている作品だから。

◆感動的な話であり、劇を見たことがあるので印象に残っているから。

◆鳴き声を上げて空に向かうよだかは、本当に「やけてしまっても構わない」からです。彼は星になったことで報われたのだと思います。

グスコープドロの伝記

◆グスコープドロの伝記を読み、主人公の勇氣に挑戦する勇氣をもらえたからです。

◆ブドリの自己犠牲の精神と、

宮澤賢治センター今後の定例研究会の予定

- 9月16日(金) 話題提供者:石原黎子氏(宮澤賢治センター会員)
話 題:賢治作品・朗読—私の場合
- 10月21日(金) 話題提供者:中村一基氏(岩手大学教育学部教授)
話 題:「ドリームランドとしての日本岩手県」考
- 11月17日(木) 話題提供者:大野眞男氏(岩手大学教育学部教授)
話 題:柳田国男と宮沢賢治

決断力に感動したからです。
◆みんなのために働くブドリに感動します。

その他に人気がある作品としては、セロ弾きのゴーシュ、どんぐりと山猫、猫の事務所、オツベルと象、土神と狐、水仙月の四日、風の又三郎、茨海小学校などがあげられました。やはり、小学校や中学校で接した作品に親近感を感じるようです。

第5回宮澤賢治センター学生短歌大会御案内

皆様の御支援により、宮澤賢治センターの学生短歌大会も、第5回を迎えることになりました。

本年度も昨年度に引き続いて「宮澤賢治記念短歌会」が主管致しますのでよろしくお願い申し上げます。「宮澤賢治記念短歌会」は、宮澤賢治の盛岡高等農林学校までの文芸活動のほとんどが、「短歌」であったことを記念して、月例の活動を行っている団体です。活動場所は、宮澤賢治センターの設置場所(実務につきましては、岩手大学地域連携推進センターが行っております)であり、今大会の表彰式会場でもあります「岩手大学・百年記念館」であります。具体的実施要項は以下の通りです。

ふるって応募くださいますようお願い申し上げます。

記

主催:宮澤賢治センター
主管:宮澤賢治記念短歌会
後援:(含交渉中)岩手大学、盛岡大学、岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、花巻市教育委員会
テーマ:広い意味で宮澤賢治に

関わるものであること。

投稿資格:幼稚園・大学・大学院の学生・生徒であること。

投稿可能数:一人一首

募集期間:2011年9月1日

(木)~2011年11月

12日(土)(郵送の際は、

同日到着)

選者:佐藤通雅、文屋亮、望月

善次

投稿先・問い合わせ先:宮澤賢治センター

住所 〒020-8551

盛岡市上田4-3-5

岩手大学地域連携推進センター

TEL:019(621)6672

FAX:019(621)6493

E-mail:renkei@iwate-u.ac.jp

表彰:★学校種別の枠は設けず、幼稚園・大学の一括審査とする。

最優秀賞(1人)

優秀賞(2人)

入賞(若干名)

学校賞(若干校)

★賞状、賞品。

なお、最優秀賞受賞者には、

表彰式参加の交通費(必要に応じては宿泊費)を支給。

表彰式:2011年12月10日

(土)10時00分(岩手

大学・百年記念館(宮澤

賢治センター))

編集後記

▽3月11日に起こった東日本大震災の発生から4ヶ月になろうとしています。今なお被災して苦しんでいる人々がたくさんいます。

そうした中で、牛崎敏哉さんが定例研究会で話題にしたように「雨ニモマケズ」などの賢治作品が世界各国で注目され、広く読まはれています。

賢治の37年の生涯には、三陸地震津波や関東大震災など多くの自然災害が起こっており、当然賢治はそうした自然災害のニュースに触れ心を痛めたことでしょう。

本号では大震災に関連し、京都在住の浜垣誠司さん、宮澤賢治センター理事でもある木村直弘さんと岡崎正道さんから現体験に基づいた原稿を寄せていただきました。

大震災はそれぞれの生き方を問い直すきっかけを与えてくれたようです。賢治が生きていたかどうかという行動をとったのか、本人に聞いてみたい気がします。

宮澤賢治センター5周年記念のイベントは盛況裡に終了しました。パーティーには40名あまりが参加し、「星めぐりの歌」の演奏などアトラクションも披露され、なごやかな雰囲気のまま時間が流れてゆきました。新しく入会された方々も満足して帰宅したようです。

学生の参加が少ないことが少し残念でしたが、新しく学生の理事も誕生し、今後に期待したいと思います。宮澤賢治センター学生短歌大会も今年で5回目を迎えました。ふるってご応募下さい。

人と人とを結びつけるという点で、賢治ほど吸引力をもった作家はほかにほとんどいないでしょう。賢治縁と私は勝手に名づけているのですが、宮澤賢治センターが賢治縁を媒介する存在になればよいな、と思っています。

(佐藤竜一 記)

宮澤賢治センター通信

〇発行

〒020-8551

盛岡市上田四丁目三番五号

電話 〇九六二二六六七二

FAX 〇九六二二六四九三

E-mail:kenji@iwate-u.ac.jp

HP: http://kenji.gcs.iwate-u.ac.jp/

宮澤賢治センター(岩手大学内)

発行責任者 岡田幸助

〇印刷 杜陵高速印刷株式会社